

8. 大島四郎著『安房の潮左為』からみる小谷兄弟とA.M.アーレン

米国カリフォルニア州のモントレイ半島周辺は、海藻が豊かな海で本格的な鮑漁がなく大量の鮑が存在していたという。佐賀県出身の移民野田音三郎やサンフランシスコで雑貨店を開いていた静岡県出身の井出百太郎が鮑漁に着目し、農商務省を通じて専門家の渡米を依頼したことから渡米鮑漁師たちは誕生した。

千葉県の本根で器械式潜水による採鮑や乾鮑製造の事業を営んでいた海産物問屋金澤屋の小谷清三郎のもとで、鮑漁に関わる水産知識や技能、とくに乾鮑製造などに携わっていた源之助・仲治郎兄弟は、1897（明治30）年農商務省からの要請で渡米したとされる。だが、水温の低いモントレイ半島周辺、とくにポイントロボスにおいて小谷兄弟らは、器械式潜水具を導入して採鮑漁に成功したものの、乾鮑製品にして中国や日本への輸出は、アメリカ人の理解が得られなかった。日本人の採鮑漁が厳しく規制されていく状況を打開するために、小谷兄弟は鮑漁のあり方を研究し、現地の理解を得る方策をさがしていたという。そのなかでポイントロボスの実業家A・M・アーレンは、小谷兄弟の採鮑漁への熱意や高い水産知識に接するなかで、乾鮑ではなく鮑缶詰にする共同事業の提案に賛同したといわれる。排日の嵐のなかでアーレンの資金や援助なしに源之助・仲治郎兄弟の器械式潜水による採鮑魚や鮑缶詰の事業はなかったのである。

以上のような経緯を記録した仲治郎の資料が少しでも遺されていれば、調査研究が違ったものになっただろう。ただ、仲治郎の二女美枝の夫である大島四郎が手書きしたものであるが、『安房の潮左為』（私家版・1983年）という表題で義父仲治郎の生涯を作成していた。出版されることなくコピーしたものが何部か製本され、今日まで遺されてきた。実際、大島が仲治郎から直接、証言を得たものや、自身の体験はじめ家族や関係親族から見聞いたものなので一級の史料といえる。ただ、仲治郎が1943（昭和18）年に亡くなってから40年近く経っているのに、大島自身がかつての証言や見聞体験などの記憶を丁寧に取り上げてはいるが、裏付けのある資料をさがしての執筆とのことで、当時資料を手に入れるのは今とは違い難しかったものと推察する。

なお、大島は1929（昭和4）年、早稲田大学高等師範部在学中の夏休み、出身中学校の後輩たちを連れて房州一周キャンプ旅行をおこなったとき、キャンプ地になった七浦村で仲治郎と出会ったという、そのことがきっかけに翌年、七浦小学校の代用教員として赴任することとなった。村の学務委員であった仲治郎には下宿として長性寺を紹介されるなど、その後も懇親が深まっていき、1935（昭和10）年には、仲治郎の二女美枝と結婚したのである。大島が七浦村に来た1カ月程前、1930（昭和5）年7月1日に63歳の源之助はカーメル病院で亡くなっている。8月に仲治郎と出会った後に、大島は礼状を出し、そこに「…あの海外雄飛のお話はまったく胸をうたれ…万里の波濤のかなた、遠い異境で健闘された七浦出身の方々…移民法案の記憶と新たな北米カリフォルニアにおける移民に関するお話などもっともっとお聞きしたい思い…」と書いたと述べている。仲治郎は出会ったばかりの学生であっても自宅に招いて歓迎する人柄であり、暗雲立ち込める国内外の政治情勢のもと、渡米体験を若者に伝えたいとの思いをもっていた人物であった。

さて、『安房の潮左為』では、第5章「アメリカにおける軌跡」のなかに仲治郎を中心とした渡米した鮑漁師たちの動きが描かれ、なかでもマクミラン・アレキサンダー・アーレンのことが数多く紹介されている。大島が仲治郎から直接、聞いた渡米10年間の話の多くは、アーレンとの出会いと共同事業のことであったのではないかと思われる。第5章の構成は、第1節アーレンとのめぐりあい、第2節アワビ漁業の罐詰会社の創立、第3節モントレイ湾のアワビ、第4節創業の苦心、第5節兄源之助の渡米と兄弟の協力、第6節邦人潜水夫の渡米、第7節日露戦争当時のこと、第8節

帰国、第9節アーレンとの惜別、第10節赤毛布(げっと)、第11節アメリカ講、第12節業績追慕、となっているが、それぞれの節ではアーレンに関わることが中心に扱われているので、大島の記憶には数多くの言葉が残ったと推察している。

仲治郎の生涯を描くことになった動機として、大島は第5節「兄源之助の渡米と兄弟の協力」のなかに、「…異国で事業をはじめるとあって仲治郎は兄の源之助を日本から招き、兄弟力を合わせて、冒険ともいべき異国における創業の難事にあたった…」とし、「…源之助がいつアメリカに渡ったのか、その正確な月日はわかりかねるが、仲治郎は事業をおこすにあたって兄との協力を考えたものと推考されるので、源之助の渡米は事業発足の直前か、またはその直後のことであったと思われる…」と、大島はまだ小谷兄弟渡航の旅券下付記録があることを知らなかったと思われる。

ゆえに「…異説もある。その一つは『大場俊雄氏』の説である。同氏は米国における邦人のアワビ漁業について研究し、『米国のアワビ漁業における潜水技術を導入した小谷源之助と千葉県出身の漁業者』と題して、その研究結果を発表しているが、その中で、同氏は『先に渡米してアワビ漁業に従ったのは源之助であり、仲治郎は遅れて渡米したもの』として、『…モンレー湾のアワビに着目した井出という日本移民が、日本の農商務省に、アワビ漁業の専門家の人選と派遣を依頼した。それによって選ばれて渡米したのが源之助で、弟の仲治郎はその後、兄を頼って海を渡ったもの』としていることに、「…この説には疑問点があって、私としては納得しがたく思われる…」というのである。

大島は「…農商務省から選ばれたのは源之助ではなくて、弟の仲治郎であったと思われる…農商務省の推薦と養家の類焼という不測の不幸事が重なって、渡米を決意し実行するにいたったものではないか…」と語るだけではなく、「…このことにもまして大場説を疑わしく思う理由は、仲治郎の生前、私は何度かにわたって直接本人から『渡米してアーレンの協力を得てアワビの会社をおこし、兄をよんで一緒に仕事をした』と聞いていることである。謙虚で、自己宣伝めいたことが嫌いであった仲治郎が、そして兄弟仲がよく兄思いであった仲治郎が、兄の業績を自分のものとして人に語るということなどはまったく考えられぬことなのである…ことの真実だけは記しておきたいと思う…」と、「ことの真実だけは記しておきたい」と強く主張している。それは仲治郎本人から直接聞いたという自負があって強調しているのである。

そのことで仲治郎本人が本当に「渡米してアーレンの協力を得てアワビの会社をおこし、兄を呼んで一緒に仕事をした」といったのであろうか。ここで考えられることは、大島の記憶でいっている『兄を呼んで』の一言は、モンレーとポイントロボスという採飽場所の思い違いであって、渡米に関わる一言ではなかったのではないか。

源之助は当初、モンレーのパシフィックスグローブにいた野田音三郎のもと素潜りでの採飽魚をし、鮑の調査活動を担った仲治郎はモンレー半島周辺やカーメル湾、とくにポイントロボスなどに足を運んでいたのではないか。そんななかでポイントロボスではアーレンと出会ったことで、鮑を加工する会社の話となり、モンレーにいる源之助をポイントロボスに「呼んで一緒に」アーレンと仕事してはどうかという話になったのではないか。後述でも大島は「…モンレー湾に臨むポイントロボス（ロサンゼルス市の南方。モンレー半島にあり、モンレー市に属す）…」と、地理的に間違っただけで把握している。

野田音三郎に関わる文献や資料などでも、モンレーとポイントロボスの採飽場所の違いが明確になっていないことで、混乱をおこしているものがあつた。大島も仲治郎の言葉を理解するうえで、現地のことを知らないことでの思い違いがあつたかもしれない。

いずれにせよ、もし仲治郎自身が「…アーレンの協力を得てアワビの会社をおこし…」と語ったのであれば、この点を検討しなくてはならないと思う。源之助は「…弟と力を合わせて創業…仲治郎が帰国した後は弟に代わって一切の責任を買って会社の経営にあたった…」とし、明治 39 年に「仲治郎の帰国した後、会社のたどった道はけっして平坦なものではなかった…大正期に入るや、日本人排斥のあらしは全州に吹きまくり、大正 12 年にはついに排日法案が成立…邦人関係の事業が次々と倒産してゆく苦渋にみちた時代を彼の会社は耐え抜いた…日本から潜水夫を呼ぶことを認められるという特別な例外措置までうけて、やがては社運の隆昌期を迎えるにいたった…主として源之助の努力と手腕によるもの…その業績は不滅のもとして高く評価すべきである」と、語っているので、大島は第 2 章で取り上げた源之助の「陳情書」の存在は知っていたのか。

「アーレンとのめぐりあい」のなかで大島は、「…アーレンはアメリカにおける仲治郎の無二の知己であり、その理解と協力なくしては仲治郎の成功は考えられない、といっても過言ではないといえる…アーレンと仲治郎が結びついたのは水産物に関する仲治郎の博識であった」という。そして、続けて「…あるとき加州海岸で大学生たちが魚介類の調査研究を行っていた。たまたまその海岸にいわせられた仲治郎はその様子をながめていたのであるが、採集された貝の名や分類がわからず学生たちがしきりに論議しているのをみて、彼は明快に説明して学生たちを驚かせた。つづいて不明の魚介類がでると、学生たちは仲治郎の意見をもとめる。仲治郎は迷うところなくテキパキと回答し引率指導の教授たちをして顔色なからしめた…」との記述があった。この出来事については、第 5 章のなかで取り上げたが、モントレイにあるスタンフォード大学ホプキンス臨海実験所での研修会のことと思われ、実際にポイントロバスの海岸において仲治郎やアーレンらが学生や教員たちと出会った可能性は高い。「この出来ごとによって『おそるべき篤学の日本青年』として、アーレンは仲治郎に対して強い関心をいだき、やがて二人を強く結びつける…」ことになったのだろうと大島は捉えている。

アーレンは「…カリフォルニア州のモントレイ地方の大地主であると共にアメリカにおける著名な建築設計家で、その設計によってつくられたすぐれた建造物はアメリカ国内にいくつも残されているという（筆者もいくつかを聞いていたが、残念ながら失念してしまった）アーレンは建築家としてすぐれていただけでなく、人間的にも気宇宏大にして信義にあつい高潔な紳士で…仲治郎が異境において、この人と会うことが出来たのはまことに幸福なこと…」と、大島は仲治郎の人生のなかで、アーレンという人物の存在を大きく位置付けた。

「アワビ漁業と罐詰会社の創立」の節では、源之助ではなく仲治郎がいたからこそ、アーレンとの共同会社の設立が可能であったという主張が大島の記憶に残っている真実とわかる。その経緯は「仲治郎は心中ひそかにねっていた自分の計画をアーレンに話して…カリフォルニアの沿岸の無尽蔵とも思えるほど豊富なアワビを採取して、アメリカ人の食膳にのせようとする計画…熱意をもって縷々、その抱負を説き、アーレンの批判を乞うた…仲治郎の計画をよく理解…実施にあたっては協力を惜しまぬこと…アーレンの出資と協力によって仲治郎の計画は実施された…ポイントロバス…に『ポイントロバス・キャニング・カンパニー』という名の会社が創立され、事業が開始された」という。「出資者と名義人はアーレンであったが、その経営に関することのいっさいは仲治郎にまかされ…『金は出すが、実際の仕事については口を出さない』、これが二人の間にかわされた紳士協約…」ということを仲治郎は、大島に伝えたかったのではないだろうか。大島は会社設立の年月は「おそらく明治 33、4 年のことであったと想像」といっているので、会社関係の資料は持っていなかったようだ。

「モンレー湾のアワビ」では、「ポイントロバス…モンレー半島の根元に位するモンレー市に属する海岸地…」と、大島は思い違いをしている。仲治郎から「…源之助一家に邦人従業員を加えてうつつた源之助邸での記念写真の何枚か…」を見せてもらったときに、ポイントロバスやアーレンなどについての話題が上がったのだろう。「…はじめてこの地を視察した仲治郎は、岸のすぐ近くの磯に、日本ではとても見られぬような大きなアワビがごろごろしているのを見て驚嘆したという。大正になってから仲治郎にすすめられて器械潜水夫として、ここで働いた七浦村千田の高橋源之助は、『ポイントロバスの沖合は米国太平洋沿岸ではアワビの宝庫。7～8メートルの海底にもぐると、殻の長さ20～30センチ以上の、日本ではお化けのような大きなアワビが岩の上でたくさんとれた。日本の潜水夫が専門にこれを採取、1日1人4、500キロはとれた。』（サンケイ新聞、昭和39・12・20）と語っている」ことを記述し、大島は「…アワビは日本のそれとは比較にならぬほど大きく、かつ豊富であった…宝庫にめぐりあう…アーレンの知遇を得たことはまことに幸福なこと…」であり、それとともに「…大きなアワビの殻を器用な日本の従業員たちは、余暇を利用してはヤスリでみがいて飾りもの…まことに美しく…殻はこまかにきられて細工されて、見事なカウスボタンやブローチなど…」にした取り組みも紹介している。

「創業の苦心」の節では、「…仲治郎の創業の苦心は容易ならぬもの…アメリカ人はアワビを食べることを知らなかった…アワビはいくらでもとれた。しかし、これをうりさばかなくては会社の経営は成り立たない。販路の開拓、それはアメリカ人にアワビになじませ、これをその食膳にのせる…そのためにはいかにすべきか…創業時の仲治郎に課せられた大きな課題…ねばり強く、調査研究…種々試行錯誤を重ねた末に、アワビの缶詰をつくり、さらにスライス（うす切り）にしてみたところ、これが成功して突破口となり、アメリカ人もようやくアワビに親しみ、やがては生アワビもその食膳にのせられるにいたった…」という。「…若さ情熱をかたむけての仲治郎のねばり強い努力が見事に実をむすんだのである。大げさにいえば、彼のこの成功はアメリカ人の食習慣の新開拓、食膳の改善である…」と、大島は仲治郎の業績を評価し、さらに「…徒手空拳入国した日本の若人が事業をおこし、これを軌道にのせ成功させることは、たとえアーレンの力強い協力があったとしても、誠に容易ならぬ至難なことで…仲治郎は見事にこれをなしとげたのである。思えば実に痛快事であり、不滅の業績…」と語るものの、具体的にどのような活動の結果なのかを裏付ける資料は示されていない。

「兄源之助の渡米と兄弟の協力」のところでは、「大場俊雄」説への疑問を解明していくことを執筆の動機にしていると大島は記述している。再度取り上げるが、「…大場説を疑わしく思う理由は、『仲治郎の生前、私は何度かにわたって直接本人から』…真実だけは記しておきたい…」と語っている。その言葉には重いものがあり、仲治郎の事績を伝えたいとの思いには強いものがある。

「邦人潜水夫の渡米」では、「…仲治郎が創立したポイントロバスのアワビ会社において、アワビを採取したのは彼が日本の房州から呼びよせた漁師たちであった。はじめのうちは岸辺の浅いところでもいくらでも採れたモンレー湾のアワビも…漁場は次第に沖の方に移り、漁法も裸のままでする「素もぐり」から潜水器具を使う「器械もぐり」に変わっていった…」までは経緯はわかるが、なぜか「…「素もぐり」から潜水器具を使う「器械もぐり」に変わって…」といったかの説明がない。うえに、「…アメリカ人はじめカリフォルニア州に住む多くの国の移民たちは潜水器に慣れず、その技術を身につけた者はきわめてすくなかったので、仲治郎は故国の房州からはるばる潜水漁夫を呼びよせ…」というのは、モンレーやポイントロバスで器械式潜水の採鮑が始まったことを、仲治郎からはそれほど聞いていなかったのではないかと暗示させる。

ただ、七浦村にもいた大島は「…仲治郎が帰国した後も兄源之助にひきつがれ、増員や帰国などによって出来た欠員補充のために次々と適任者が選ばれて房州からポイントロバスにおくられていた。帰国後の仲治郎が源之助の委嘱をうけて、その人選から渡航までの一切のことにあたったということ…」は、身近なこととして知っていたのである。

排日の嵐の中であって、大島は仲治郎がよく口にしていたことは「…ポイントロバスのアワビ会社の潜水夫だけは例外とし、特別措置によってひきつづき入国を認められた…潜水器械によって海底のアワビを採取…『器械もぐり』が日本人の特別技能に認定された…異例ともいふべき特別措置は…アーレンの懸命な努力によるもの…」との深い感謝の言葉であったという。

「帰国」のころでは、仲治郎の帰国に関する旅券下付年月がまだ不明で「1907（明治40）年」となっている。その後、1906（明治39）年が帰国の年と判明している。

「…仲治郎は日本に帰国した。ときに33歳。明治30年に渡米してより10年、その間、事業に没頭して一度も故国の土を踏むことのなかった…アワビ会社（ポイントロバス・キャニング・カンパニー）を設立して年なお浅く、かついまだ33の壮年の彼がなぜ帰国するに至ったのか、その理由はさだかにはわかりかねるが、その主な原因は故国の留守宅の事情にあったのではなかったか…」と、大島は推察している。「…仲治郎が事業に没頭している間に、故国に残してきた妻の美わは苦しい立場に追い込まれていた…美わの妹たち（美わは七人姉妹の長姉であった）は…いつ帰ってくるかもわからぬ不実ものと仲治郎を非難…美わに対する離婚のすすめとなった。美わがその勧告を聞こうとしないと妹たちは『姉妹の縁をきる』とまで言い出し…事情を知った仲治郎は事態解決のために帰国を決意したと思われる…」と述べている。このころの経緯は大島が関係者から証言を集めたのであろうか。仲治郎の証言とは考えられない。

「…後事のいっさいを兄源之助とアーレンに託して帰国の途についた。帰国後の彼が源之助の要請をうけては優秀な潜水夫を選んでポイントロバスに送っていた…源之助に協力して会社の発展のために心を用いていたが、彼自身は再び太平洋を渡って、なつかしいモントレーのちを踏むことはついになかった」。そして、「…責任者として会社の運営に専念していた源之助は1930（昭和5）年、モントレー病院で没した…ポイントロバスのアワビ会社は源之助の死と日米関係の険悪化によって、仲治郎の創業以来およそ40年の昭和14、5年のころ廃業されるにいたった。房州から働きに来ていた潜水夫たちもみな帰国した…」

「アーレンとの惜別」の節では、大島は「…名残りのおしまれたのはアーレンとの別離であった…アーレンは異境のアメリカ合衆国における仲治郎の無二の理解者であり努力者であった。若い仲治郎がいかにか水産に対する造詣が深く、経営の才があったとしても、異国において冒険ともいふべきアワビ漁業に成功することができたのは、アーレンの協力…なくしては彼の成功が考えられぬといっても過言ではない…二人の間の結びつきは年齢を越え国籍をはなれて、年とともに誠に深いものがあつた…」と記述した。その後、二人が深く胸に刻んだ友情と共生の精神をもった日米交流は消え、悲惨な戦争の時代と向かっていく。そして、渡米した鮑漁師たちの歴史も消えていったのである。

今回、『安房の潮左為』で紹介したところは一部分である。大島四郎は教育者として『安房の潮左為』を世に出すにあたって、小谷仲治郎の生涯を顕彰するだけでなく、渡米した鮑漁師の歴史を通じて、安房の地域史を豊かなものにしたと願ったのではないか。平野家文書とともに後世に向けて紹介していきたいと思っている。

本報告は『明治期に渡米した房総アワビ漁師たちの源流～小谷源之助・仲治郎兄弟と金澤屋の人

びと〜』の続編として記述したものである。前報告では、「平野家文書」を紹介する程度の部分的に限られていたので、小谷源之助・仲治郎兄弟が渡米する背景や現地での動きは他の文献の引用になっていた。

それらのなかで早めに報告する必要がある事項は、内容が不十分であっても追加した方がよいと考え続編を書いた。明治期、米国とは様々な分野で交流が進むだけでなく、日本からの移民が増えたことで排日問題がおこり、鮑漁師たちも大きな影響を受けながら、現地の人びとと向き合って事業を続けていった。

明治期に渡米した房総鮑漁師たちの歴史は、日米の交流史においてどのような位置づけとなる出来事といえるのか、また安房の地域史にどのような一石を投じていった出来事になったか、今後ともさぐっていきたいと思っている。

【二つの報告はNPO法人安房文化遺産フォーラムHP
(房総アワビ移民研究所HP) に掲載してあります。】

明治期に渡米した房総アワビ漁師たちの源流

2022年5月改

～小谷源之助・仲治郎兄弟と金澤屋の人びと～

NPO 法人安房文化遺産フォーラム 愛沢 伸雄
(房総アワビ移民研究所 研究チーム)

0. はじめに	1
1. 明治の長尾村根本	2
2. 海産物問屋・金澤屋と『長尾村誌』	5
3. 根本で始まった潜水器採鮑漁と森一族	7
4. 「慶應幼稚舎」で学ぶ源之助と横浜・清水屋	10
5. 乾鮑製造と小浜「器械根」の採鮑漁	14
6. 清国との海産物貿易と水産伝習所創設	18
7. 金澤屋と海産物商人～萬屋・伊豆屋・石福	21
8. 水産伝習所で学ぶ仲治郎～明治23-24年	25
9. 金澤屋を支えていた人びと	30
10. 佐渡の森知幾と源之助の活躍	37
11. 源之助の「逃亡」事件とよばれた出来事	42
12. 磯焼けと根本での調査・「あわび研究」	45
13. 源之助・仲治郎兄弟が渡米にいたるまで	48
14. 金澤屋の女性たち	53
15. 明治女学校のひでと画家倉田白羊	61
16. 清三郎の死去と仲治郎	65